

2021年度 ASD project 第1期生  
フォローアップシンポジウム

## 2021年度 ASD project 第I期生フォローアップシンポジウム 式次第

令和4年2月6日(日)  
京都大学 芝蘭会館稲盛ホール

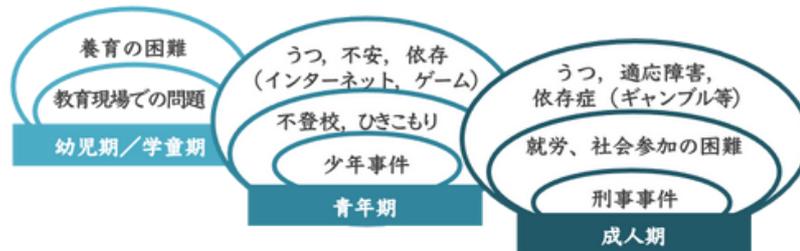
1. 開会の辞 稲富宏之 実行委員
2. ご挨拶 京都大学人間健康科学系 足立壯一 専攻長
3. ASD project 教育プログラムの趣旨説明 十一元三 実行委員長
4. 修了生を軸としたネットワークづくり: 滋賀県との連携
  - i. 滋賀県連携の経緯 滋賀県顧問 笹田昌孝 先生
  - ii. 滋賀県知事からのメッセージ 三日月大造 滋賀県知事
  - iii. 滋賀県派遣の第I期修了生からの報告
  - iv. 滋賀県教育委員会教育長からのメッセージ 滋賀県教育委員会 福永忠克 教育長
5. 第I期修了生の活動状況
6. 発達症支援と学術的エビデンス
  - i. アートの視点と発達症 京都市立芸術大学 松井紫朗 教授
  - ii. 子どもみんなプロジェクトと  
大阪府支援体制整備事業の経験からみた  
京大ASD projectの意義 大阪大学 片山泰一 教授
  - iii. 子どもの認知発達と教育：  
記憶研究からのエビデンス 上越教育大学 内藤美加 教授
7. プログラム評価に関する報告とディスカッション 義村さや香 実行委員
8. 閉会の辞 稲富宏之 実行委員

## 「発達症への介入による国民的健康課題の解決」プログラムの概要

我が国では現在、うつ・不登校・ひきこもり・依存症といったメンタルヘルスの問題が対処に注力すべき健康課題となっています。これらの問題の背景に、発達症、なかでも自閉スペクトラム症（autism spectrum disorder: ASD）が大きく関与していることが、近年臨床現場から指摘されるようになりました。

ASDを持つ人が抱える問題は、ASD特有の物事の捉え方や物事への反応の仕方（精神生理）、体験様式（精神病理）、ライフステージやその人を取り巻く状況などにより、多種多様な形で現れます。そのため、支援には医療・教育・就労・福祉・司法などの領域で多職種・多機関の連携を必要とすることが少なくありません。しかしながら、ASDの精神生理や精神病理を理解した上で支援にあたる専門家はまだまだ少なく、専門家を養成する教育機関も限られているという現状にあります。

### 自閉スペクトラム症のある人がライフステージで直面する問題



平成31年度からスタートした「発達症への介入による国民的健康課題の解決」(ASD project)は、文部科学省の資金提供のもと、本学の半世紀以上にわたるASDへの取り組みを活かし、作業療法学講座の教員が中心となって運営されるプログラムです。医療者および医療関連職に就いている方を対象として、医療分野のみならず、アートや司法領域の内容も含んだ授業や参加体験型実習、事例分析論文の作成指導を2年間120時間実施し、以下のような「自閉スペクトラム症高度専門支援者」を育成します。

- ◆ ASDの診断・評価の基礎となる医学的知識と特徴的な精神生理や精神病理を理解できる
- ◆ ASDのある人がライフステージで直面する諸課題に対して適切に対応し支援できる
- ◆ メンタルヘルス問題に関連する医学、保健学、心理/社会学、リハビリテーション科学などの複合領域の知識と技術を用いて、学術的に問題解決できる

養成した人材が地域で支援ネットワークを形成し、支援の内容や要請に応じて多職種が連携・対応する、研修会により常に知識をアップデートする、行政と連携して本プログラムで構築されたシステムを広域に展開するといった活動により、メンタルヘルスに関する我が国の健康課題を解決に近づけていきたいと考えています。

## 2021年度フォローアップシンポジウムで報告された第1期修了生の活動

ADS projectでは、地域に支援ネットワークを形成することを目標の一つとしています。滋賀県では第1期修了生を軸としたより大きなネットワークづくりが既に始まっていることから、本シンポジウムでは、滋賀県との連携についてまずご報告いたしました。滋賀県知事、滋賀県教育委員会教育長、滋賀県顧問の先生方からも温かいご支援のお言葉をいただき、今後の支援ネットワーク拡大に向け、非常に心強く感じております。

本シンポジウムのプログラム 4、5において報告された第1期修了生の活動について、以下に記載いたしました。既に華々しく活動されていますが、今後のますますのご活躍と支援ネットワークにおける引き続きの協働を楽しみにしております！

養護教諭  
教育委員会事務局  
指導主事

- 現場の養護教諭として
  - 早期支援
  - 校内/医療機関等との連携
- 指導主事としての活動と今後の方向性
  - 教員の資質向上
  - 学校現場における支援体制の構築

臨床心理士  
公認心理師  
不登校・いじめ問題  
チーフカウンセラー

- チーフカウンセラーとして
  - 早期支援
  - 校内/医療機関等との連携
- スクールカウンセラー・スーパーバイザーとして
  - 教員の資質向上
  - 学校現場における支援体制の構築

作業療法士

- 入院ケースにおける多職種連携
  - 運動・感覚特性の評価と介入
  - 生活機能および生活の質の評価
  - 自己理解の促進
- 研究活動
  - 発達症に併存する不眠症への治療効果検証

精神保健福祉士

- 母子保健：虐待事例における取組
  - 発達症の診断
  - 児童の居場所づくり：適応指導教室の立ち上げ
- 研究活動
  - ASD女性における妊娠、出産、育児の実態把握
  - ASD女性のスクリーニング用質問紙の開発

発達障害者支援センター  
総括主任

- 他機関連携
  - 支援者の育成・資質向上への貢献
  - 困難事例についてのスーパーバイズ
- 就労支援
  - 未診断事例への支援
  - 発達症のある大学生への支援

臨床心理士・公認心理師  
特別養護老人ホーム施設長

- ASDのトラウマへの支援
  - 特徴的なトラウマの背景にあるASDの見立て
  - 他のトラウマ治療者へのスーパーバイズ
  - 状況に応じた、柔軟な多職種連携体制の構築
- 姫路市における発達症支援ネットワークの構築
  - 「軽度」ASDを支援する相談支援事業所の開設

看護師/相談支援専門員

- 天野氏と協働する相談支援事業所の開設
  - ケースコンサルテーション
  - 専門職向け研修
  - 地域住民への啓発活動
- アウトリーチ活動
  - 行政機関をはじめとする他機関との連携
  - 他機関利用者の支援ニーズの感知

教職大学院  
准教授

- 学校園における発達相談体制の整備
  - 立場や役割の違いを尊重した多職種連携
- 研究活動
  - 支援と研究を具体的につなぐテーマ
  - 認知心理学的を応用したアプローチ
- 支援と研究の相互作用
  - 根拠・具体性を持った、支援への還元

## 発達症支援と学術的エビデンスに関する講演

アート、支援/連携体制の整備、認知心理学の視点から、3人の先生方にお話いただく機会を設けました。以下に先生方の講演の概要をお示しします。

「アートの視点と発達症」

松井 紫朗 先生

松井紫朗先生は体調不良によりご欠席となりましたが、お預かりしたスライドを会場にて上映しました。スライドでは「アートは特別なものでなく、分析の対象として見る必要があること」「ASDのある人の作品が、ASDの認知が記録されたものとしてアートの分野に新しい風をもたらし、世界観の更新をもたらすものであること」をお示しいただきました。



片山 泰一 先生

片山泰一先生には、ライフステージを通じて一貫した支援を行うための体制構築、教育関係者と研究者間の連携体制構築に関するご経験をお話いただき、多職種・他領域との連携や、エビデンスに基づく支援の重要性をお示しいただきました。ASD projectの修了生に期待される役割、方向性についても言及いただき、鼓舞された受講生も多数いたものと感じます。



内藤 美加 先生

内藤美加先生には、記憶研究の視点から見たASDの認知の非定型性についてお話いただきました。定型発達では過去と未来をつなぐ「自己(体験)」の意識が幼児期に統合されるのに対し、ASDでは統合されず、こだわりなどの臨床症状にも影響しているのではないかと興味深い仮説もお示しいただきました。

本シンポジウムの事後アンケートでは、「各専門分野からの視点からエビデンスが得られた」「情報提供をいただき、学びを深めることができた」「スケールの大きな支援の取り組みが多面的になされており、非常に印象的でした」などのご意見をいただき、効果的なエビデンスの提供ができたのではないかと感じています。

松井先生、片山先生、内藤先生、意義深いご講演をどうもありがとうございました。

## ASD project 教育プログラムの有効性に関する報告

本プログラムの有効性を検証するため、受講前後のASD支援に関する受講生の支援技能（全9項目）について、第1期修了生上司の方々には5段階評価（「1. 全くそう思わない」～「5. 非常にそう思う」）で回答いただきました。図1にお示ししたように、全ての項目において受講前より受講後の評価が有意に高く、受講後は5段階のうち4以上という評価を受けています。これらの項目は「自閉スペクトラム症高度専門支援者（ASD高度専門支援者）」に求められる高度なスキルについて尋ねるものであり、本プログラムはASD高度専門者の育成に有効であると考えます。

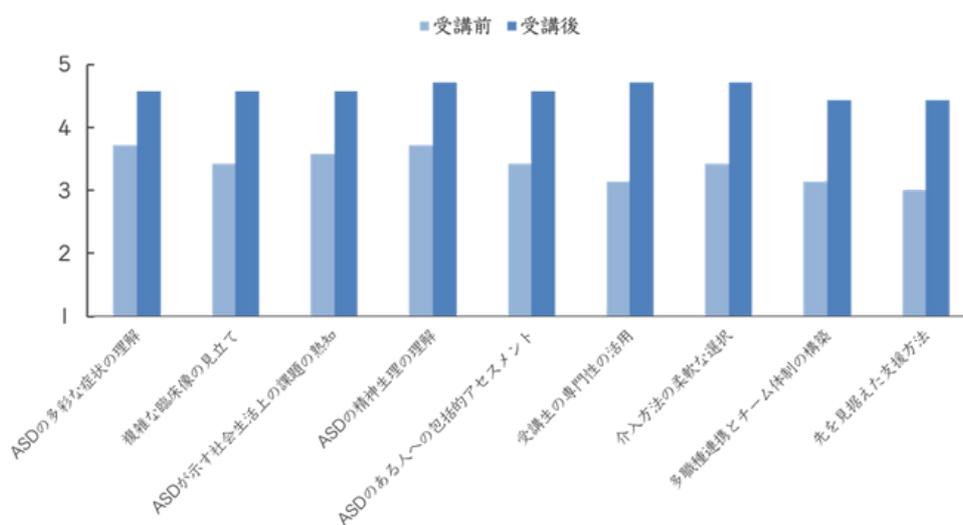


図1. 第1期修了生に関する、ASD project 受講前後の支援技能評価

また、本シンポジウムではお示しできませんでしたが、上司の方々には、第1期修了生の活動による所属機関構成員への本プログラムの波及効果に関してもお尋ねしています（図2、評価方法は受講生評価と同様）。評価を依頼した3つの項目において、受講前と比較して構成員の技能の向上が見られると評価され、本プログラムの波及効果も認められていると考えられました。

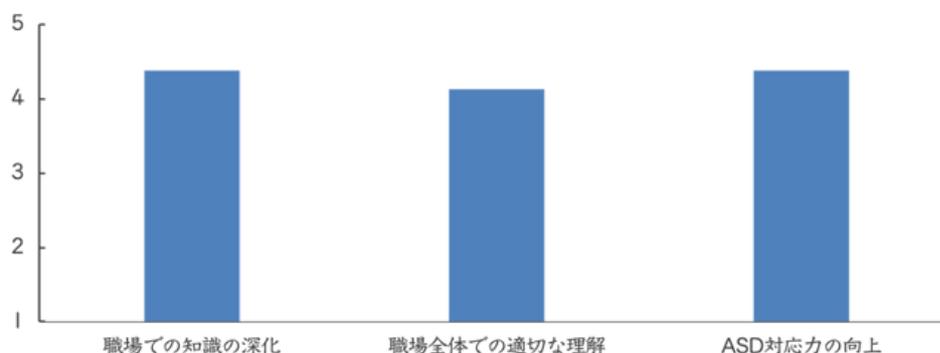


図2. 第1期修了生の所属機関構成員における波及効果

ASD project 実行委員会制作